

書 評

吉田 右子

ウェイン・A. ウィーガンド 著
川崎良孝, 村上加代子 訳

手に負えない改革者 —メルヴィル・デューイの生涯—

京都大学図書館情報学研究会 2004. 9
xviii, 494p 22cm 定価8,000円(税別)
ISBN 4-8204-0416-4

はじめに

本書はメルヴィル・デューイの伝記の翻訳である。アメリカ図書館史を代表する研究者であるウィーガンドは、神話に包まれた図書館界の巨人デューイの人生を膨大な一次資料を駆使して鮮やかに浮かび上がらせている。

この伝記の特徴は、訳者があとがきでまとめているように4点ある。まず第1には、デューイの人間的な部分をあらわにしたこと、第2には、アーカイヴ資料を用いてデューイの生涯を描いていること、第3には伝記全般に著者ウィーガンドの図書館史研究者としての批判的なまなざしが貫かれていること、第4にデューイの生涯を同時代の社会の中に位置づけていることである。第2番目から第4番目の特徴により、本書は図書館史研究者にとって必読書といえる。一方、本書はデューイをめぐるさまざまなエピソードを扱っており、伝記としてのおもしろさを十分味わうことができる読み物となっている。

本書の大部分を占めるデューイの公的、私的生活についての具体的な記述は、デューイ神話を形作るエピソードとして興味深いものがある。たとえばニューヨーク州立大学理事会事務局長時代に1日550通以上の書簡を受け取っていたデューイは、執務室に自ら考案した120の区分け棚を設け、職員はデューイと言葉を交わすことなく所定の位置に置かれたメモを介して仕事を進めた(p.198)。業務を効率よく進めるためにさまざまな用具—両端の形状が異なる奇妙な定規や、持ち替える時間を省くための特別な筆記用具を考案し、日常生活でも愛用した(p.334, 352)。理想世界の達成に向けて複数の事業を同時に進めるために健康の維持は欠かせないと考えるデューイにとって、自らの健康さえも目標管理の対象

となった。デューイ夫妻は規則正しい生活をするための規則を作成し、それにしたがって健康維持を図った(p.76)。秩序と効率がすべての行動の基本指針であった。

偉大なる遺産

複数の領域にまたがるデューイの足跡を時系列にそって整理すると以下ようになる。

表1 メルヴィル・デューイの年譜

| 年(年齢) | 主な出来事 |
|-----------|--|
| 1874(23歳) | アーマスト・カレッジ副図書館長 |
| 1876(25歳) | アメリカ・メートル法用品店の設立 アメリカ図書館協会の設立、同協会事務局局長就任 |
| 1883(32歳) | コロンビア・カレッジ図書館長就任 主題目録カードの編纂、図書館間の分担収集、図書館の協力事業、レファレンス業務 |
| 1889(38歳) | ニューヨーク州立大学理事会事務局長 州教育機関の試験・免許の質の向上、評価基準の決定、高等教育のネットワーク化、大学拡張、成人教育 ニューヨーク州立大学図書館長 蔵書の強化、州内のパブリック・ライブラリーの蔵書構成の統制 ニューヨーク州立大学図書館学校校長 実務指向型図書館員教育の確立 |
| 1890(39歳) | アメリカ図書館協会会長就任 |
| 1906(45歳) | レイクプラシッドクラブの経営 |
| 1931(80歳) | 死去 |

後世に残る成果という観点からみれば、多岐にわたる活動のなかでも図書館関係の業績が際立っている。デューイの最大の遺産は、白人中産階級と家長制度の文化的枠組みのなかで成立していた19世紀後半の図書館に、効率的な運営・管理手法とサービスの方法を適用することで、ライブラリアンシップという新しい専門領域を作り上げた点にある。またその専門領域を支えるために、図書館教育を推進することで女性図書館員を中心とする司書職の構造を確立した。さらにすべての図書館業務において徹底的な効率化をはかり、ライブラリアンシップを規格化した。デューイ十進分類法や、7.5×12.5cmの目録カード、図書館の備品、用品など図書館業務のあら

July 2005

ゆる部分にデューイの遺産が残されている。

またデューイはアメリカ図書館協会の仕事とともに、メートル法普及運動、簡易綴り字普及運動に携わった。これらの事業は成功したとは言いがたいにせよ、デューイが生涯をかけて追求した改革運動であった。アメリカ図書館協会事務局長とアメリカ・メートル法用品店、綴り字改革協会の3つの肩書きが1枚に書かれた名刺(p.63)は若きデューイの目指していた理想世界を示すものである。

保養施設レイクブラシッドクラブの運営は、デューイの人生で最も長期にわたる事業となった。1920年代中頃に最盛期を迎えたクラブには、各種店舗、ゴルフコース、テニスコート、図書室が完備され、大規模な敷地ではさまざまなプログラム—オーケストラ、礼拝、ダンス、音楽祭が企画された。1908年にはレイクブラシッドクラブでアメリカ家政学協会が設立されている。家庭運営の効率性を追求する家政学と家庭教育全般の向上を希求するデューイ夫妻の目的は重なり、レイクブラシッドは家政学のための実験室という意味合いを持つようになった。デューイの妻アニーはレイクブラシッドクラブ運営のための詳細なマニュアルを作成し、これは家政学の教科書として全国で使われた。

負の遺産

ウィーガンドは一次資料を駆使して丹念にデューイの遺産を掘り起こしたのだが、それは同時に背中合わせにあった負の遺産をも浮き彫りにした。

たとえば司書職に関して、デューイは「最善の読書」の選択の権限を司書職以外の専門職に委譲することに疑問を抱かなかった。司書は資料選択の役割を放棄し、司書職の読書への関わり方は限定的になった。ウィーガンドによればライブラリアンシップには、デューイ自身が持つ偏見が反映した。デューイ十進分類法、公共図書館の蔵書構成、図書館教育など、いずれのプロジェクトにも中産階級の思想が組み込まれたが、それは現実社会の多様なあり方とは隔たりがあった。

またデューイの会計手法には重大な欠陥があった。デューイはアメリカ図書館協会の仕事とメートル法普及運動、簡易綴り普及運動など複数の事業を同時に進め、会計を一つの帳簿で管理しようとした。誤った会計処理が事業に実質的な損害を与えたにもかかわらず、デューイは経理に関わる独自の考え方

吉田：書評『手に負えない改革者』

や複数の事業を混在させる手法を改めようとはしなかった。

デューイの残した最大の負の遺産は、人種差別主義である。ウィーガンドは、レイクブラシッドクラブにおけるユダヤ人入会の拒否により浮上した人種差別主義が、すでにコロンビア州立大学理事会時代にも表れていたことを指摘する。デューイは専門職の確立に重点をおき教育機関の評価基準の設定に力を注いだのであるが、その際、ユダヤ人にとって専門職参入への唯一の手がかりであった、私立の専門職養成学校に批判的な態度をとっていたからである。デューイがレイクブラシッドクラブで構築しようとしたコミュニティは、その内部に、WASP(White Anglo Saxon Protestant)のみをその構成員として認める人種や階級に不寛容な思想をはらんでいた。

また女性との付き合いに関しても問題があった。1905年のアメリカ図書館協会年次大会後の旅行で、女性に対して行った抑制の効かない行動は、女性に対する振る舞いとして明らかに社会的規範を逸脱していた。

デューイはライブラリアンシップにおいて女性を積極的に登用し、専門職として認めていたし、ユダヤ人と個人的に友好関係を結びその高い能力を評価したのかもしれない。しかし仮にそれが真実だとしても、デューイの実際に取った行動は差別行為としか表現できないものであった。人種差別主義と女性への振る舞いは、デューイの評価を徹底的に損ねた。

「手に負えない」巨人

デューイの肩書きは幾度も変わったが、その生涯は一貫して「改革と効率性」の追求に捧げられた。ウィーガンドは、デューイの志向が中産階級の家父長制を基盤とした同時代のWASPの世界観から生じたものであると指摘している。福音主義に強く影響を受けたデューイの生い立ちは、信仰心に基づく改革運動への揺るぎない精神を育み、その思想の中核には、人類の進歩のために己のすべてを捧げる利他主義という名の道徳観がおかれた。

WASPの世界観や福音主義の改革運動に問題があったわけではなく、それらとデューイの強烈な個性が結びついたとき、「手に負えない」状況が生まれた。というのもデューイの性格には、重大な欠陥があったからである。独善性と強引さは大きな事業をやり遂げるための必要悪の範囲を完全に超えてい

た。他人から指摘された非を認めることは決してなく、愛他主義、自己犠牲、大義、道徳主義というレトリックで常にこれを正当化した。その結果デューイは常に多くの敵に囲まれる人生を送った。しかし2人の妻をはじめとする理想世界への賛同者の存在によって、デューイは完全に孤立無援になることなくその生涯を終えることができたのである。

おわりに

デューイは複数の分野で偉大な足跡を残したが、常に障害物に真正面からぶつかり己と周りを傷つけ

ながら進んだ道のりは、困難に満ちたものであった。効率性を追求したデューイは実際には、きわめて非効率で不器用な人生を歩んだともいえる。500ページに及ぶ本書を通じてデューイの残した遺産の大きさに圧倒されると同時に、部下が来ても顔もあげずに追求した効率性とは何であったのか、生涯に渡って求め続けたデューイの理想世界とは一体何だったのかと問わずにはいられない。

(よしだ ゆうこ 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科)

児童・YA 図書館サービス研究グループ 2004年度活動報告

研究グループについて

児童・ヤングアダルト図書館サービス研究グループの活動目的は、これまでの児童書など資料研究に重点をおいた児童図書館活動研究ではなく、図書館サービスとしての活動研究にある。研究活動目的には、おおまかに以下のようなことをめざしている。日本における児童・YA 図書館員養成のガイドラインの提言、さらに児童・YA 図書館サービス活動のガイドラインの提言である。

日本の公立図書館における児童・YA に対する図書館サービス活動も不十分とはいえ、まったくの初期段階から成長期を経て拡充期にはいつているといえるだろう。そこで、現在の状況に至った経緯を確認すべく、グループとしては歴史的調査研究をまずおこなうこととした。占領期における子どもの本の贈りもの運動や戦後の CIE 図書館の児童図書館サービス、博覧会と連動した児童図書館活動などを調査し、特に大阪地域での戦前・戦後の児童図書館活動史をまとめる。「子ども」をどうとらえるかといった社会的・認知科学的・心理学的研究や、図書館資料である児童図書出版についての出版流通やその内容についての児童文学・児童文化面での多様な面での総合的な研究が必要である。そのなかで特に図書館という場において、子どもという利用者をどのように認識して、いかなる図書館活動をおこなってきたのか整理し、検証すべきである。本研究ではそういった検証をふまえ、これからの子どもへの図

書館活動と活動担当者である司書をどう養成していくのかの方向を明らかにすることをめざしている。

これまでのグループとしての活動内容を報告しておく。

◎2003年9月月例研究会

日 時：9月13日(土) 19:00～21:00

内 容：今後の予定など

◎2003年12月月例研究会

日 時：12月6日(土) 19:00～21:00

内 容：大会発表のレジュメについて

◎2004年2月月例研究会

日 時：2月16日(月) 19:00～21:00

内 容：大会発表について

◎2004年3月月例研究会

日 時：3月28日(日) 19:00～21:00

内 容：大会発表の反省と反応について。林郁子さん、貴田春男さん、山藤敦子さんらのインタビューについての検討。

◎2004年4月月例研究会

日 時：4月18日(日) 19:00～21:00

内 容：山藤敦子さんインタビューの打ち合わせ

◎2004年5月月例研究会

日 時：5月3日(月) 14:00～16:00

内 容：山藤敦子さんインタビュー

テーマ：大阪府立中之島図書館の児童サービス

要 旨：1951年4月から1953年頃(?)まで勤務。

10月に児童閲覧室を開室。2階、階段を降りて左の小さい部屋。20畳くらい。絶